

(実践報告)

## 本学における老年看護学教育の現状と課題（第2報） “その人らしさ”を考える通所リハビリテーションでの実習

樹神千尋<sup>1)</sup> 岡村絹代<sup>1)</sup> 名和祥子<sup>1)</sup> 中野志保<sup>1)</sup>

### I. はじめに

本学の老年看護学実習は、介護老人保健施設で1名の高齢者を受け持ち、看護過程を展開する3週間の施設サービス分野の実習と、通所リハビリテーション等において、地域で生活する高齢者の生活と健康状態を把握し、看護の役割と機能を理解する居宅サービス分野での1週間の実習に分けて、4週間連続で行っている。施設サービス分野の実習の内容と評価については、第1報で“目標志向型思考”を取り入れた看護過程の展開が、学生の高齢者理解を深め、生活者として的高齢者をより意識させるとともに、その思考過程が探索的な観察技術の向上に寄与できることを報告した。

しかし、介護老人保健施設での実習では、学生が受け持つ対象者のほとんどが後期高齢者または超高齢者であり、受け持った時点で加齢に伴う変化だけではなく、進行した認知症や重度のパーキンソン病、脳卒中による後遺症などが顕在している。笠井ら（笠井，2004）も示唆するように、初めての老年看護学実習で植えつけられる高齢者像が、介護が必要な人、一人では何もできない人といったネガティブなイメージとなる現状があり、学生は“その人らしさ”について考えることに苦悩する。“その人らしさ”を尊重する看護は、対象者の意思決定を支援し（斎田ら，2010）、良い最期を迎えることを可能にする。そこで、居宅サービス分野の実習においては、高齢者看護の基盤となる“その人らしさ”を考えることを大切に、高齢者の生活史の聴かせていただく事で、地域で生活する高齢者の理解を深めるとともに、ポジティブな高齢者像が抱けることを目指している。

本報では、現行の居宅サービス分野の実習（通所リハビリテーション等）に焦点を当て、その現状と課題を明らかにするとともに、2019年度入学生から適用される新カリキュラムでの老年看護学実習の内容を検討する資料とする。

### II. 居宅サービス分野（通所リハビリテーション等）の実習内容

#### 1. 実習の内容と方法（図1）

本実習は、居宅サービス分野の実習と位置づけ、図1のように学内実習と臨地実習の組み合わせにより進めている。実習初日は、学内での実習オリエンテーションを実施するとともに、学生は課題学修を行い、実習に臨む準備日としている。実習2～3日目の二日間を臨地実習日とし、学生は、教員や実習指導者の指示のもとに、通所リハビリテーション等での実習を行う。本実習では、特定の対象者を受け持たず、学生が自発的に高齢者とコミュニケーションを図りながら、生活史を聴き、また、個別の居宅ケアプランや通所リハビリテーション等での1日の流れに沿って、指導者や教員と相談しながら、高齢者ととともにリハビリテーションやレクリエーション活動、入浴介助や食事介助などを見学している。学生は、通所リハビリテーションを利用して高齢者の詳細な健康状態は把握できていないため、積極的な看護介入は行わない。また、生活史を聴かせていただく場合は、事前課題（身近な高齢者の生活史の聴き取り）の内容や、年表などを参考にしながら、高齢者の語りに耳を傾け、高齢者の生の声から座学では理解しきれない高齢者像に思いをはせる体験をしている。聴かせていただいた内容は、生活史の聴き取りから考えた高齢者理解としてレポートし、学生自身の考えをま

1) 朝日大学保健医療学部看護学科老年看護学

「居宅サービス分野」の1週間の実習プログラム

1週間の到達目標

1. 地域で暮らす高齢者の多様な生活や価値観が理解できる。
2. 地域で暮らす高齢者の健康状態と看護の役割が理解できる。
3. 保健医療チームの一員であることを自覚した行動と多職種・他職種連携が理解できる。

	月	火	水	木	金
A M	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学内実習</li> <li>・実習OR</li> <li>・実習施設、利用者に関する学修</li> </ul>	← 臨地実習 →		学内実習日 ・グループワーク	学内実習日 ・発表
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己紹介</li> <li>・ミーティングなどへの参加</li> <li>・学修目標の発表、職員への挨拶、利用者への挨拶（朝・夕）</li> <li>・コミュニケーション</li> <li>・生活史傾聴</li> <li>・看護実践の見学、補助</li> </ul>			
P M	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献、資料などの準備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習終了時に1日の目標に対する報告</li> <li>・実習1日目：デイリーカンファレンス</li> <li>・実習2日目：実習報告会</li> </ul>		・個別面接	<ul style="list-style-type: none"> <li>・記録整理</li> <li>・記録提出</li> </ul>
適宜、指導教員が記録と実践を見ながら個別指導					

図1 「居宅サービス分野」の1週間の実習プログラム

とめている。1日の実習終了時には、指導者も同席するデイリーカンファレンスにより、高齢者にはさまざまな背景があることや、普段の生活の様子に関する学びの共有を行っている。実習最終日は、実習目標に沿った自己の課題の発表を含めた最終カンファレンスを行い、臨地実習のまとめとしている。

翌日の2日間の学内実習では、1日は実習グループを解除したグルーピングを行い、各自の体験の中から実習目標に沿った学びの共有をKJ法により集約し、翌日発表とディスカッションを行っている（写真1, 写真2）。



写真1 居宅サービス分野での学びの発表風景①



写真2 居宅サービス分野での学びの発表風景②

2. 実習結果

通所リハビリテーションなどでの実習は、対象者の要介護度が低いということもあり、言語でコミュニケーションが図れる方が多い。そのためか、学生は介護老人保健施設での実習よりも活動的で笑顔が多く、多くの高齢者とコミュニケーションを中心にふれあいを楽しんでいた。中には、自ら声をかけられず、他の学生や高齢者に助けを求めらる場面も見られたが、ほとんどの学生は緊張感を持ちながらものびのびと実習に取り組んでいた。また、多職種・他職種連携についても、個別リハビリテーションや嚥下体操などの集団リハビリテーショ

ンの見学や参加，昼食や間食の様子，入浴の様子などを見学することで連携の具体化を知ることができ，高齢者の生活をみる視点や地域での生活を重視する大切さに気づくことができていた。

生活史の聴き取りからは，これまで言葉としては知っていても，想像もつかない戦争体験やリアルな戦後の生活状況，子どもへの生活支援の期待と迷惑をかけられないという相反する思いを知ることができ，会話の中から高齢者の真のニーズを考えるきっかけとなった。また，デイリーカンファレンスや最終カンファレンス，学内実習でのグループワークと発表により，一人一人に学びを共有し，“その人らしさ”を大切にすることの重要性を言語化することができていた。

### Ⅲ. 考察

本実習は，地域で生活する高齢者の生活と健康状態を把握し，看護の役割と機能を理解する居宅サービス分野として位置づけている。実習中の学生の，のびのびとした様子や学びの内容から，本実習のプログラムにより，その目的が達成できたと考えられる。

最も重要視していた生活史の聴き取りからは，学生は座学からは得られない高齢者の生活そのものを感じ取ることができていた。このことは，学生が高齢者の話を意図的に「聴く」という姿勢により得られた学びである。「聴く」ということは対象者を知る積極的なコミュニケーション手段であり，聴くことを大切にすることは，一般論ではなく，その人に適切なことばを探し出し，個人が持つ感情や主観を排除せず，理性も感情も含めた全人格での対応であり（暉峻，2019），看護の基本でもある。“その人らしさ”は，看護学分野において，頻繁に使用されている概念であり，明確にされているわけではない。黒田らは（黒田ら，2016），看護学分野における“その人らしさ”の概念分析により，“その人らしさ”を形成する因子として，【生きてきた過程における体験の蓄積】と【社会的相互作用】の2つのカテゴリーを導き出し，人間は，過去から現在，未来へと時間の流れの中を生きている存在であり，過去の経験がその人をつくり，社会的存在である人間は相互作用のなかで生き，それらの体験がその人を形づくっていくと述べているように，学生も一人の高齢者の過去から現在を知ることによって，その人らしい未来を創造しようとしていた。したがって，本実習での生活史の聴き取りからとらえた“その人らしさ”は，今後の学生の看護実践の基盤になると考えられる。

### Ⅳ. 結論

2019年度の居宅サービス分野の実習の現状と評価から，以下のことが明らかになった。

1. 通所リハビリテーションなどでの実習は，学生の過度な緊張を解きほぐし，高齢者との主体的なかわりにより，高齢者の生活や他職種・他職種連携に関する学びを深めることができた。
2. 意図的な生活史の聴き取りの機会を作ることは，座学での知識を統合させ，高齢者の過去から現在までの生活を具体的に知ることができ，その結果，高齢者が望む“その人らしい”未来を築く看護につながるといえる。

### Ⅴ. 今後の課題

本実習が，地域で生活する健康な高齢者を知る実習の位置づけとしては偏りがある。なぜなら，通所リハビリテーション施設は，要介護認定を受けた高齢者が対象となるからである。今後は，対象者の範囲を，健康の保持・増進や介護予防に取り組む高齢者等に拡大し，社会福祉協議会やふれあいサロンなどでの実習を検討していく必要がある。

なお，使用した写真は学生の許可を得て撮影しております。

## VI. 文献

- 笠井恭子, 吉村洋子, 寺島喜代子 (2004). 臨地実習における看護学生の高齢者イメージの変化, 福井県立大学集, (23), 107-116.
- 黒田寿美恵, 船橋眞子, 中垣和子 (2017). 看護学分野における『その人らしさ』の概念分析 — Rodgers の概念分析法を用いて —, 日本看護研究学会雑誌, 40 (2), 141-150.
- 齊田綾子, 小泉美佐子 (2010). 意思確認が困難な終末期高齢者の看護 — 家族との話し合いによりその人らしさを看護に取り入れることを目指した終末期看護支援手順導入の効果 —. 老年看護学, 14 (1), 43-45.
- 暉峻淑子 (2019). 豊かさは対話の中に. 日本老年看護学会第 24 回学術集会抄録集 p58.